様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月　 ９ 日現在

機関番号：１０１０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2017
課題番号：１６Ｋ１６８５３

研究課題名（和文）他動詞虚辞構文に関する史的統語研究

研究課題名（英文）A Syntactic Approach to the Development of Transitive Expletive Constructions

研究代表者
本多　尚子（HONDA, Shoko）

北海道教育大学・教育学部・特任講師

研究者番号：４０７３５９２４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,000,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、他動詞虚辞構文を含む各種虚辞構文の発達は、縄田（2016)の分析とChomsky（2013)で提案されたラベル付けのアルゴリズムを仮定することで理論的に解明できると主張した。当該分析に基づけば、従来の分析とは異なり、なぜ非対格虚辞構文においてはvP内で関連要素DPを認可できる一方、他動詞虚辞構文や非能格虚辞構文においてはv*P内で関連要素DPを認可できないのかも理論的に予測できる。

研究成果の概要（英文）：　This study aims to account for the development of expletive constructions in the history of English, by postulating the cartographic approach proposed by Nawata (2016) and the labeling algorithms proposed by Chomsky (2013).
　It is argued that the loss of verbal plural number morpheme -en in the latter half of the fourteenth century caused Fin to get an obligatory EPP-feature and, with the analogy to Fin, T to get an optional EPP-feature, which in turn led to the appearance of transitive expletive constructions and unergative expletive constructions.　It is explained that the (un)grammaticality of transitive expletive constructions and unergative expletive constructions is due to the (im)possibility of the labeling, not the (im)possibility of the nominative checking in the TP domain, proposed by some previous studies.　Then, the loss of transitive expletive constructions in the sixteenth century is shown to be that of T-to-Fin movement and V2 word order.

研究分野：英語学

キーワード：英語史

１．研究開始当初の背景

(1) 英語史における他動詞虚辞構文についての先行研究では、特に他動詞虚辞構文の特異性に着目し、その出現及び消失の動機とメカニズムの解明のみに焦点が置かれていた。そのため、そこで仮定された分析が非対格動詞を伴う通常の虚辞構文や非能格虚辞構文の派生にどのように影響するか、特に、英語史において他動詞虚辞構文が 14 世紀後半から初期近代英語期初頭というごく限られた期間のみ許されていた事実と、通常の虚辞構文が古英語期から現代英語期に至るまで絶えず存在し続けていた事実に対してどのように共通の理論的道具立てに基づいた説明を与えることができるかはほとんど考えられていなかった。

(2) 本研究の核心をなす学術的「問い」は、非対格動詞を伴う虚辞構文が古英語期から現代英語にわたり存続し続けることができたのはなぜかと、他動詞虚辞構文が後期中英語期に突如出現し初期近代英語期初頭には消失してしまった要因及びメカニズムは何であるのかである。

(3) 前述の問いに答えるために必要とされるのは、他動詞主語 DP は“何らかの理由で”v*P 領域外へ必ず出さなければならない一方、非対格動詞が伴う DP は vP 領域内の元位置で留まれることを合理的に説明することである。そこで、本研究が着目したのが Chomsky (2013)のラベル付けのアルゴリズムである。ラベル付けのアルゴリズムに従えば、他動詞虚辞構文の主語 DP はラベルを決定するために、v*P 構造から外へ移動されなければならない一方、非対格動詞が伴う DP はラベル付けの観点からは vP 外に移動される必要はない。従って、他動詞主語 DP と非対格動詞が伴う DP との振る舞いの違いを正しく予想することができ、他動詞虚辞構文と通常の there 構文の通時的発達過程の違いを正しく導くことができるのではないかと考え、本研究の着想に至った。

２．研究の目的

(1) 共時・史的コーパス等を通じ言語資料を収集・分析し、他動詞虚辞構文、非能格虚辞構文、そして非対格虚辞構文に関する言語事実の発掘を行うと共に、there 受動文の特徴等との比較研究も行い、当該構文の言語変化の要因及びメカニズムをより局地化・精緻化する。

(2) 英語史における他動詞虚辞構文に関する言語事実と、通常の虚辞構文において見られる通時的・共時的言語事実を、Chomsky (2013)のラベル付けのアルゴリズムなどを仮定することにより共通の理論的説明から導くことができる統語分析を提案する。

(3) 英語史における他動詞虚辞構文の発達に関する統語分析を他言語の他動詞虚辞構文の分析等にも活かせるかどうかなど、同研究を共時研究の発展に活かす可能性を探る。

３．研究の方法

(1) これまでの予備調査を継続し、3 つの史的コーパス The Penn－Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition (PPCME2)（中英語）、The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME)（初期近代英語）、The Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE)（後期近代英語）と共時コーパス The Collins Wordbanks Online (Collins)（現代英語）を使って調査を行い、他動詞虚辞構文をはじめ、非能格虚辞構文、非対格虚辞構文、there 受動文の歴史的変遷を明らかにする。

(2) 調査の結果明らかになった事実に対し、極小主義に基づく生成文法理論を用いた原理的説明に着手する。その際、Chomsky (2013) のラベル付けのアルゴリズムと縄田 (2016) の史的素性推移分析の観点から説明を試みる。

(3) 他言語の他動詞虚辞構文などに関する言語事実を調査し、当該構文の特徴を本研究で提案する統語分析で説明可能かどうか検討する。

４．研究成果

(1) 英語史的コーパス調査の結果から、古英語期から現代英語まで一貫して観察される語順パターンを含む非対格虚辞構文と、他動詞虚辞構文や非能格虚辞構文といった他の種類の虚辞構文との間には、史的変化のパターンとしても明確な相違があることが明らかとなった。特に、後者の構文を統語的観点から見ると、そこには関連要素 DP の vP 領域外への義務的な左方移動が関わっている可能性が示唆されている。他方、前者の構文、すなわち、There shall come a lamb out of Winchester では、関連要素 DP が明らかに vP 内の元位置に留まっている。興味深いことに、非対格虚辞構文では、こうした語順パターンの他に、関連要素が非対格動詞に先行する例も観察されており、これらの事実から vP の内項である関連要素の移動は義務的でないと考えられる。この事実に基づき、本研究では、他動詞虚辞構文や非能格虚辞構文の関連要素 DP、すなわち v*の外項は、v*P 領域外へと義務的に移動する一方、非対格虚辞構文の関連要素 DP、すなわち v の内項は、vP 領域外への移動は随意的である可能性が高いことを突き止めた。

(2) 前述の英語史的コーパス調査の結果と、縄田(2016)において英語史における定形動詞の位置の推移を捉えるために提案されて

いる史的素性推移分析、さらには Chomsky (2013)のラベル付けのアルゴリズムとを組み合わせた結果、英語史において虚辞 there が占める統語構造上の位置が、古英語期から 14 世紀後半までは TopP 指定部、14 世紀後半から 16 世紀初頭までは FinP 指定部、16 世紀初頭以降は TP 指定部と変化していることを突き止めた。
また、談話階層言語から命題階層言語への変化、すなわち話題卓立言語から主語卓立言語への変化に従い、義務的な EPP 素性の出現位置も古英語期から 14 世紀後半までは Top 主要部、14 世紀後半から 16 世紀初頭までは Fin 主要部、16 世紀初頭までは T 主要部へと変化した他、14 世紀後半から 16 世紀初頭にかけては談話階層言語から命題階層言語への過渡期であったため T 主要部位置に随意的な EPP 素性が出現していた可能性を、経験的事実と共に指摘した。そして、他動詞虚辞構文と非能格虚辞構文は、義務的な EPP 素性が Fin 主要部に出現し、（随意的な）EPP 素性が T 主要部に出現する場合に限って文法的とされる構文であり、従って、それらは 14 世紀後半から 16 世紀初頭にかけ容認されたことが理論的に予測可能となった他、T 主要部が随意的な EPP 素性を持つことで、14 世紀後半から 16 世紀初頭にかけて非対格虚辞構文が持つ 2 つの語順パターンが導かれ、そのうちの 1 つが、他動詞虚辞構文等と共に 16 世紀初頭に衰退、最終的に消失するという言語事実もまた理論的に説明可能となった。
　以下では、本研究においてその文法性を予測可能となった構造を、英語史の時代区分毎に、文法的な構造、非文法的な構造とに分けて提示する。

古英語期から 14 世紀後半
[ForceP Force [TopP there [TopP [Top shall] [FinP Fin [TP T [vP v [VP [V be] [DP no man]]]]]]]]

*[ForceP Force [TopP there [TopP [Top shall] [FinP Fin [TP T [?P [DP no man] [v*P v* [VP [V say] [DP that]]]]]]]]]

*[ForceP Force [TopP there [TopP [Top can] [FinP Fin [TP T [?P [DP no man] [v*P v* [VP [V pass]]]]]]]]]

14 世紀後半から 16 世紀初頭
[ForceP Force [TopP Top [FinP there [FinP [Fin shall] [TP T [vP v [VP [V be] [DP no man]]]]]]]]

[ForceP Force [TopP Top [FinP there [FinP [Fin shall] [TP [DP no man$_i$] [TP T [vP v [VP [V be] [DP t_i]]]]]]]]]

[ForceP Force [TopP Top [FinP there [FinP [Fin shall] [TP [DP no man$_i$] [TP T [v*P [DP t_i] [v*P v* [VP [V say] [DP that]]]]]]]]]]

[ForceP Force [TopP Top [FinP there [FinP [Fin can] [TP [DP no man$_i$] [TP T [v*P [DP t_i] [v*P v* [VP [V pass]]]]]]]]]]

16 世紀初頭以降
[ForceP Force [TopP Top [FinP Fin [TP [DP there] [TP [T shall] [vP v [VP [V come] [DP scoffers]]]]]]]]

*[ForceP Force [TopP Top [FinP Fin [TP there [TP [T shall] [v*P [DP no man] [v*P v* [VP [V say] [DP that]]]]]]]]]

*[ForceP Force [TopP Top [FinP Fin [TP there [TP [T can] [v*P [DP no man] [v*P v* [VP [V pass]]]]]]]]]

(3) there 受動文の通時的発達との関わりもコーパス調査の結果を踏まえ検証したが、there 受動文の関連要素 DP には、他動詞虚辞構文等のそれには見られない数量詞表現を伴うものが多いといった特徴や否定の文脈の方をより好むなどの統語的特徴が観察されたため両者の発達過程を直接関連付けることは困難であると分かった。

(4) 各種虚辞構文の通時的発達過程を説明するために重要な役割を果たす EPP 素性に関する変化を引き起こす要因は、縄田 (2016)で仮定される史的素性推移分析に基づき、動詞屈折の衰退に伴う素性継承先の変化であると特定することができた。

(5) また、最終年度に実施した研究の成果としては、当該研究の成果を他言語の虚辞構文に関する理論的説明にも活かすことができるかを検討した結果、少なくとも他動詞虚辞構文と非能格虚辞構文を共に許すタイプの言語であるオランダ語、ドイツ語、アイスランド語などのゲルマン諸語の言語事実が説明可能となり得ることを突きとめた。

(6) これまでの研究の成果を、最終年度において、査読付き全国誌である『近代英語研究』に論文（Honda (2017)）として発表した。特に、Chomsky (2013)のラベル付けのアルゴリズムを用いて各種虚辞構文の共時的言語事実だけでなく通時的言語事実をも理論的に説明可能となることを示したことで、今後、英語史における他の様々な構文の通時的発達過程もラベル付けのアルゴリズムを用いて理論的に説明可能となることが期待される。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

① 本多 尚子、虚辞構文の歴史的発達について、近代英語研究、査読有、33 巻、2017、1－26

〔学会発表〕（計　１件）

① 本多 尚子「他動詞虚辞構文とその関連構文における共時・通時」、史的英語学研究会第 3 回大会（2017 年 8 月 19 日：島根大学）島根県松江市

６．研究組織

(1)研究代表者

本多　尚子　（Honda, Shoko）

北海道教育大学・教育学部・特任講師

研究者番号：　４０７３５９２４

(4)研究協力者

田中　智之（Tanaka, Tomoyuki）